

2022 年 9 月 20 日

## 博報堂教育財団 第 15 回、16 回「日本研究フェロシップ」

## 成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名（フリガナ） 在住国名	蘇 明仙（ソ ミョンソン） 大韓民国
所属・役職	済州大学・教授
招聘回：招聘研究予定期間 （招聘研究期間）	第 15 回：2021 年 9 月 1 日～2022 年 8 月 31 日 (2021 年 6 月 1 日～2022 年 8 月 31 日)
受入機関	東京外国語大学
招聘研究テーマ	日本列島がみた「朝鮮戦争」-1950 年代に発表された文学作品を中心に—
研究目的	1950 年代に刊行された文芸誌(日本の文芸誌、在日朝鮮人によるエスニック雑誌、サークル誌)の中で「朝鮮戦争」をモチーフにする小説作品を研究の対象にして、日本人と在日朝鮮人は「朝鮮戦争」をいかに語っていたのかを考察する。
研究成果概要	<p>1. どのように研究を進めたか</p> <p>&lt;2021 年 9 月～2022 年 5 月(韓国滞在)&gt;</p> <p>■本研究は 1 次資料(1950 年代に発行された文芸誌)から「朝鮮戦争」をモチーフにする作品を発掘する作業が優先されるべきなので、出国できない間は復刻版が出た文芸誌(『人民文学』『新女性』『東京南部サークル雑誌集成』)を取り寄せて読んだ。小説作品が載っている『人民文学』と『新女性』を主な研究対象として戦後文化運動の中のサークル誌における「朝鮮戦争」表象を考察した。</p> <p>■1950 年代を対象とした研究書と研究論文、朝鮮戦争関係の研究書を取り寄せて読み、朝鮮戦争に関する最近の研究状況を把握した。その一方、文学作品における日本の「朝鮮戦争」像を研究する相対的な観点の確保のため、朝鮮戦争を描いている 1950 年代の韓国小説を分析した。</p> <p>&lt;2022 年 6 月～2022 年 8 月(日本滞在)&gt;</p> <p>■コロナの影響で他機関の図書館利用ができなかったため、東京外国語大学図書館が所蔵している雑誌を中心に文献調査を始めた。一通り読み終わったのは『新日本文学』で、『新潮』『文学界』『群像』『中央公論』『世界』は朝鮮戦争期(1950 年～1953 年)まで調査を完了した。</p>

■収集した資料を分析しながら、研究成果報告のために成果を文章化する作業を行った。

## 2. 研究によりどのような知見が得られたか（具体的に）

■朝鮮戦争期の韓国文壇の特殊な環境と従軍作家団の反共文化運動の様相

■「朝鮮戦争」をモチーフにする 1950 年代の韓国小説の特徴（戦争期と休戦後）

■朝鮮戦争期の在日朝鮮人の大衆文化運動団体の活動

■「朝鮮戦争」をめぐるサークル誌と中央文芸誌の類似点と相違点

■『新日本文学』と『人民文学』の中で語られる「朝鮮戦争」の類型

■「朝鮮戦争」をめぐる在日朝鮮人文学、韓国文学、日本文学のそれぞれの語り方の特徴

## 3. 研究成果（予定を含む）

○論文（題目、掲載誌、発行者、掲載月、内容の概略（200 字以内））

・「日本列島がみた「朝鮮戦争」-1950 年代に発表された小説作品を中心に」（『日本文化研究』韓国日本文化学会、2023 年 2 月発行、2022 年 12 月末に投稿予定）

—「日本研究フェローシップ」の研究課題に対する最終成果。1950 年代に発表された文学作品を通して同時期の日本は「朝鮮戦争」をいかに語っていたのか、その全体像を考察する研究論文。

○口頭発表（題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略（200 字以内））

・「『新日本文学』と『人民文学』で展開された「国民文学論争」について」（仮題）

大韓日語日文学会 2023 年春季国際学術大会（4 月 15 日）

—戦後の「国民文学論争」の展開様相を考察し、『新日本文学』と『人民文学』における「国民文学論争」の特徴を韓国の米軍政期（1945. 8. 15～1948. 8. 15）の「民族文学」をめぐる談論との比較的観点から考察するもの。

○その他の活動

■受入担当教授の友常勉先生の大学院のゼミを聴講し、多くの刺激を受けた。

■東京外国語大学国際日本研究センター比較日本文化部門主催の東アジア連続講演会〈境界と路上を考える〉（全 6 回）にオンライン参加。

## 4. 今後の活動予定

■1 年間の研究では日本の文芸誌に発表された文学作品を通して 50 年代の日本列島は「朝鮮戦争」をどのように語っていたのかをめぐって全体像を探るものだったが、今後は発掘した作品をより深く分析して 50 年代の日本文学研究につながるものとして研究していく予定である。

■学術大会や研究会などで研究成果を報告していく。